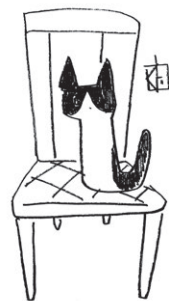


色となり カタチとなり 人となり

第一回

「見立てと引用…人を描かずに人を表す」

Kei SUGIYAMA
杉山佳



独特なフォルム、あたたかみのある絵肌…。室内にある椅子や食器、楽器などをモチーフに、穏やかにナイーブな絵画世界を紡ぎ出す日本画家・杉山佳さんの短期連載。全四回。最新作とエッセイでその制作を紹介します。



《山に見える部屋》 ●×●cm 日本画

普段の作品のテーマは「不在」。〈見立てと引用〉を表現する、という思考回路で制作しています。椅子をモチーフにすることが多いのですが、これは椅子を人物に見立てているということ。私の制作は、「人を描かずに、椅子やメガネといった身近にあるもので人を表せないか…」という試みにほかなりません。

では、なぜこうした絵を描くようになったのか……。よくよく考えてみると、子どもの頃の経験が大きかったのだと思います。不思議なことに、私の実家では、これは父の椅子、これは母の皿、これは兄の箸といったように、椅子も食器も、家族がみんなバラバラのものを使っていました。お揃いのデザインのものを使うのがフツウだと思うのですが、なぜか違うものを使うのがフツウだと思ってしまう。



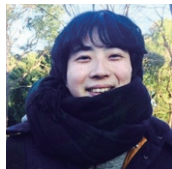
《木々に見える部屋》 ●×●cm 日本画

すが……。そうした経験から、身近なものを描くことで、間接的に「人となり」を表せるのではないかと、いつの頃からか考えるようになったのです。そして、さまざまな家具が存在する「部屋」という空間にも魅力を感じています。部屋にあるものは、その部屋の主人（あるじ）のライフスタイルがカタチとなったもの。選んだものや、使っているものにその人の個性や趣味嗜好が表れることは言うまでもありません。たとえ、主人が不在であったとしても、個性や趣味嗜好がものたちに宿り、集積することによって日々の暮らしを映し出す部屋は、その人物が過ごした〈記憶の容れ物〉として、より強く、その人物を表すものではないか。そんな風にも感じているのです。

つまり、私の描く椅子やメガネは、そのひとつひとつがポートレートであり、それらで満たされた部屋の絵は、〈人物の群像としての表現〉と言えるのかもしれない。



《海に見える部屋》 ●×●cm 日本画



すぎやま・けい

1988年奈良県生まれ。2015年東京藝術大学美術学部卒業(サロン・ド・ブランタン賞)。16年松伯美術館日本画大賞展優秀賞。17年同大学院修了(東京藝大美術館買い上げ賞、平山郁夫奨学金賞)、創画展初入選。20年同大学院博士後期課程美術専攻日本画修了・博士号取得(博士論文『不在』)。銀座スルガ台画廊、アートスペース羅針盤、松坂屋ほかで個展。現在、東京藝術大学日本画教官室教育研究助手。

<https://www.sugiyamakei.com/>

杉山佳 日本画展 —絵肌について

会期 9月14日(水)~20日(火)

最終日は16時閉場

会場 岡山天満屋 5階美術画廊

☎086(231)7523(直通)